



巻 頭 言

サンドバッグの独り言

(財)日本植物調節剤研究協会 理事 西 貞夫
(社)日本施設園芸協会 会長

環境破壊や農薬のマイナス、あるいは近代的農法に対する攻撃や批判に熱心な方々が、その理由や実証的な拠り所とされる資料の始まりは次の二つにあるといっていよいであろう。

その一つは、レイチェル・カーソン女史の書かれた科学普及書“サイレント・スプリング”(日本訳題名“生と死の妙薬”後に“沈黙の春”)であり、他の一つは有吉佐和子氏が、昭和50年(1975)に、新潮社から出版された小説(?)“複合汚染”であろう。後者はその年のベストセラーの一つとなり、その表題は、流行語化して、農業以外の分野にも広く転用され、その後のわが国農業に対する一般人の不信を醸成する、大きな働きを果たしたという人が多い。ある風俗史書によると、“快適な暮しのお手伝いをするはずの中性洗剤が、実は我々の身体をむしばんでいる。そればかりではない。生命維持にとって欠くことのできない飲み食い自体が、我々の身体をむしばむことになり、遺伝子をも傷つけ、これから生まれてくる子供達も危険なのだ。そのうち、“無農薬精子・卵子”なんてのが売り出されるのではないか、などという笑えない笑い話もあった。こわい話”と内容解説されている。時効となったのか、この“小説”のネタとなった、農薬悪者説のデータはすべて、わが国三大新聞社の一つの、科学記者の取材提供によったと最近伝えられているが、筆者はそれまで愛(全)読していた、この作者から失礼する事になった。何分にも当時は、さる高名な中京地方の大学学長が、“中性洗剤の毒性の証明”として、洗剤原液をかけられたゴキブリが即死するのを、学生に示したという時代でもあった。この高名な科学者は、ゴキブリが気門で呼吸するため、膜面形成能をもつ中性洗剤の、気門封鎖で死ぬのを見て、洗剤の生命への危険性の現れと、得意気に述べられたのであった。“複合汚染”の中にも、これに似た話が幾つかあった。

カーソン女史の著書は、「一貫した立場と数多くの事例が、美しい文章によってまとめられており、科学史の上からみても社会史の上からみても、世界の世論を動かしたもの”(大串龍一)とされ、それ以前にも環境破壊に関する生物学的な警告書が多数出版されながら、時期尚早のためか、世論に受け入れられなかったのに対して、丁度食糧不足の緩和(小さな必要悪も認めないことになる)と、他の鉱工業による環境汚染が、目立って人間の健康や生活を脅す様になった時期に遭遇した事もある、企業の営利主義やそれに通じた官庁の無策あるいはサボタージュを突くという運動の、バイブル的な存在となったのである。しかしながら当時から、農薬無しで現代の農業はやって行けるのかという疑問は提起されており、さまざまな妨害や非協力を退け、他人に頼らず自らの手で資料を集め、より多くの人々を納得させるだけの書物や論文を、苦しみつつまとめたというカーソン女史達も、農林業における農薬不要論や反対論を主張したのではなく、農薬の不必要な乱用の害を戒め、必要最低限の使用は止むを得ないと、説いておられたのである。しかしながら、その後の経過の中では、カーソン女史もまた、“農薬悪玉論”の主張者あるいは“農薬なき農業”の推進者であるかの如く理解され、美化され、殉教者の如くされるに至ったことは、真に残念であるというほかない。

ここ数年来の環境保護論隆盛の中にあって、われら農薬関係者は、感情論的な反論は一切控えて、唯ひたすら反対論・非難論者からの攻撃を、サンドバッグの如くに耐えている様に思われる。それは一重に、ボクシングにおけるその如く、バッグを叩く人々が、それによって、やがては物事の本質を理解する力を、身につけて下さるものと期待し、その一助に成りたいと願うからに、ほかならない。